

## 先

週号の「人生の誰彼」で活塾亭のことも落語を大いに褒めてもらったので、少々鬱屈してた気分がぐんと持ち上がり、一週間は落ちないが、ぼくにとつてはどんなにうれしい言葉も一週間が上限なので誤解がない方がいいと思う。

落語教室生は現在20名、年齢は3歳から11歳、キャリアは半年から2年半、稽古は毎週からほとんどなしまで、一人一人みんな違う。うちの教室生であることと規定するのは、活塾亭を名乗って寄席に出演することとぐらいいだ。その出演も本人と保護者の都合とやる気次第だから、世間一般の塾のイメージとはずいぶん違うかもしれない。寄席の後に質問を受けると、そのズレが露わになってとてもおもしろい。

「練習はいつしていますか？」

お客さんは、子どもたちの努力に感心したので、

「毎日やっています」と言う子がいると、「ほう」と声がか聞こえて拍手が起こつたりする。ちよつぱりきまり悪そうに「本番前にちよつとやります」と答える子には笑い声上がるのだが、そんなバラバラ具合がうちの教室である。

「どのくらい持ちネタがありますか？」

多い子は二桁を数える。持ちネタを増やすことに熱

心で次々とリクエストしてくる子も中にはいるのである。一方で、いつまでたっても同じ噺を繰り返している子もいる。同じ子どもの中にも覚えたてしようがない時とどうにもやる気が起こらないという意欲の干満はあるのだし、結果を求める必要も必然性もないのだから、それぞれの子に任せるほかない。持ちネタの多寡で褒めたり叱ったりなどはほしくない。どつちだつていいのである。

「先生はこわいですか」

これもなぜかよく出てくる。ちよつとぼくをからかって場を和ませたいのか、これを言う質問者はたいいていニヤニヤしている。しかし、こんなゆるゆるの方向性のない教室にこわさの入り込む余地などどこにもあるはずがない。どんな質問もまじめに受け止める子どもたちは、いいえ、だの、ぜんぜん、など真顔で答えている。こちらは苦笑するほかない。ただ、こわくする必要がないのは、少なくとも子どもたちがお客さんの前で真剣だからなのだが。

「落語をやってどんな力がつきましたか」

子どもたちはしばし黙り、やがてぼつりぼつりと答え始める。一つ一つの答えがりつぱだつたりかわいかったりする。さあ、と首をかしげる子がいるとお客さんといつしよに笑いながら、いいなと思う。

2026.2.16

1526号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

## 木幡智恵美

69

## 何

のためらいもなくきつぱりと仕事を辞めた。ところが、二十九年間のほとんどを子育てしながら仕事し続けて来た身には、家に居ることが妙に落ち着かない。まさに専業主婦初心者だ。時間に追われる生活を続けてきて、いきなり目の前に無限の時間が広がった。どう手を付けたらいいのか。通勤通学時間帯に人前に出ることもはばかられた。仕事をしないでいることが罪悪のように感じられたのだ。そんな思いを紛らわそうとして作った「やりたいことリスト」を一つ一つこなしていく。家中の大掃除をし、伯父に借りた畑を耕し、奈良への小旅行に出かけたり、長男のアパートを訪ねたり。

そうしているうちに、やりたいことリスト中の一番だった北海道旅行に出かける日がやってきた。ルートは夫と二人で決め、ロードマップは夫、宿泊先の予約は私と仕事を分担した。家のことは娘と二男に託して、七月七日に二台のバイクに乗って出発。七月半ばになるとフェリー代が高くなるためこの日を選んでのだが、二十時間以上フェリーに揺られ、夜小樽のペンションにたどり着くとやけに寒い。翌朝起きて窓から外を見ると、マーガレットが咲いているではないか。五月に咲く花だから、ここ北海道は島根の二か月くらい前の季節なのだ。結局、この年の北海道巡りは寒さとの闘いだった。持ってきた衣類をすべて着込み、首にはタオル、ジャケットの上に合羽を重ねた。狩勝峠では雪の壁の間を走り、阿寒に着いた時はたまらずホッカイロを買った。そんな過酷な旅ではあったが、見知らぬ土地で知り合ったライダーたちと仲良くなった。その人たちから旅のコツを教わる。あまり細かい計画は立てないこと。出会った人たちから得た情報を元に軌道修正をする柔軟性を持つこと。ライダーハウスの存在も知った。バイクに乗る人限定の宿で格安の金額で泊まれるという。次回はそれを利用することにしよう。寒さには参つたけれども、霧のない青々とした摩周湖の姿を見ることができたし、硫黄山では道に寝そべっているキタキツネにもお目にかかれた。美瑛では白、ピンク、薄紫のジャガイモの花や緑の葉で織りなすパッチワークの景色も楽しめた。なにより松山千春歌う「はてしないーおおぞらとー」が自然と頭の中に流れてくる広大な大地、のんびりと草を食む牛たちの姿を眺めながら走るの最高だった。

30代フリーター 衆院選で自民党は結党以来最多の議席を獲得し、他を圧倒した。

年金生活者 次の段階に移行しようとしている資本主義の意志のあらわれをそこに見ることができる。高市人気をレバレッジとして、実力をはるかに上回る議席を手にした自民党は、その意志にこたえようとしている。

資本主義が移行しようとしている次の段階とは、新たなバージョンの商業資本主義であり、高市政権の「積極財政」はそれをあと押しする「ネオ重商主義」にほかならない。それをひとこと言えれば軍事と経済の結合の強化だ。

かつての西欧の絶対王政国家は、兵器や軍事技術、航海術の開発によって常備軍を強化するとともに、その力による航路の開拓を進め、植民地貿易、遠隔地貿易のインフラを構築した。それは「重商主義」と呼ばれ、商業資本主義の発展をあと押しした。

高市政権の「ネオ重商主義」は、AI・半導体、造船、量子コンピュータ年金 もしそれが立憲支持層の中道離れの主因だとすれば、安民法制廃止、原発廃止を主張する共産党やれいわ新選組、社民党がその受け皿となり、票を伸ばしていいはずだが、結果は逆だった。朝日新聞の出口調査では、参院選で立憲に投票した有権者のうち共産、れいわ、社民に投票したのはあわせて9%に過ぎず、この3党はいずれも議席を大幅に減らすか議席ゼロだった。

これに対し、参院選で立憲に投票した有権者のうち、同党より右寄りの自民、日本維新の会、国民民主党、参政党に投票した有権者の比率を合わせると、22%になる。

立憲と公明は右に行き過ぎた高市政権に対抗する新党として中道を結成した。つまりその出発点はイデオロギーにあり、「生活者ファースト」はあとづけのスローガンだった。イデオロギーをもとにした政治は右であれ、左であれ、中間であれ、一般国民に対して「これが正しいのだ」という上から

核融合、創薬、バイオ、航空、宇宙などへの投資を進めることによつて、防衛力を強化すると同時に、資本主義の次の段階となる新バージョンの商業資本主義に必要な新たな産業インフラの構築を進めようとしている。

30代 「積極財政」はインフレをエスカレートさせるとの批判が多い。年金 インフレには国の借金の多くをそれと気づかせずに踏み倒す「インフレ税」と呼ばれる効果がある。同時に円安を招くので、輸出で稼ぐ大企業を潤わせる。政権にとつては、財政破綻を回避し、自民党の主要な支持基盤である大企業を喜ばせる一石二鳥の効果がある。「積極財政」は高市政権には必須の政策だ。

だが、国民のほうは物価高だけでなく、知らない間に行われる事実上の増税に苦しめられる。高市フィーバーは、そんな「積極財政」を国民に受け入れさせるために、資本主義が演出した壮大なイリュージョンにさえ見える。

30代 中道改革連合の惨敗を「自滅」目線になりやすい。中道に合流した立憲にもそれがあつた。その源流は左のイデオロギーにある。旧民主党はかつての日本社会党の議員らが合流して大きくなった。社会党が掲げた社会主義はその思想をさかのぼればレーニンに行き着く。レーニ

と評する指摘が多い。

年金 中道の敗因はその党名に象徴される。有権者が「中道」という言葉から受ける印象は、右と左の中間というイメージだろう。つまりこの党は右と左を両端にしたイデオロギーの物差しで政治をとらえている。それが多くの有権者から拒否された。「大事なのは考えの左右じゃなくて、生活の上下だろう」と。

30代 中道の敗因のひとつに、立憲民主党の支持層が離れたことがあげられている。朝日新聞の出口調査では、昨夏の参院選で立憲に投票した有権者のうち今回の衆院選で中道に投票したのは63%にとどまる。公明党に投票した有権者の74%が中道に投票したのに比べると、立憲支持層の中に中道への忌避感があることがうかがわれる。

その主な理由を立憲の基本政策の転換に帰する見方がある。これまで立憲は安民法制の違憲部分の廃止や「原発ゼロ」を主張していたのに、新党結成に際し公明の主張を丸呑みして、安民法制を合憲とし、「原発ゼロ」の表現をやめた。

ンの考え方は知識人でつくる前衛党が労働者や農民を指導しないと、革命はできないという、「超」がつくほどの上から目線で成り立っていた。その残滓が立憲にもあり、それが中道に持ち込まれた結果、一見そうとは見えないイデオロギー政党が誕生した。

2017年に希望の党の結成から「排除」されて、立憲民主党を立ち上げた枝野幸男は結党記者会見で「対立軸は左か右かではなく、あくまでも上からか下からかだ。上からの民主主義、強い者からの経済政策が限界に達し、弊害が大きくなってきている。草の根からの民主主義でなければいけない」と訴えた。それが衆院選で希望の党を上回る議席を獲得する力となった。

これに対し、希望の党は安民法制の容認を入党の条件にした。その「排除の論理」に「イデオロギーファースト」の臭いをかき取った有権者は多かったはずだ。それなのに、中道はその轍を踏んだ。

ニュース日記 1003  
中村 礼治

## 自民圧勝は資本主義の意志だ